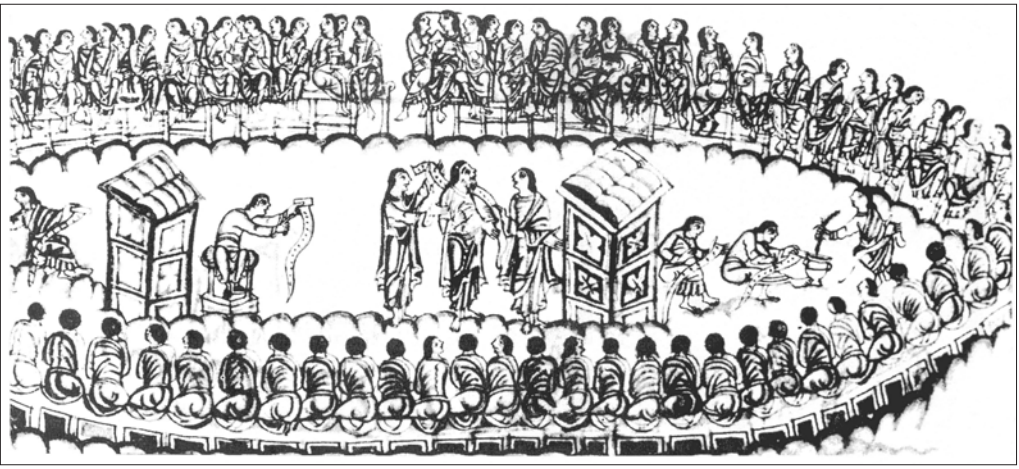
日本中世英語英文学会
第34回全国大会
プログラム・発表要旨

時：2018年12月1日(土)・2日(日)
所：愛知教育大学

The 34th Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
1-2 December 2018
Aichi University of Education



日本中世英語英文学会

目　　次

会長挨拶…… 3
会場案内…… 4
　　会場までのアクセス…… 5
　　愛知教育大学詳細図…… 6
　　会場見取り図…… 7
プログラム　第１日　12月１日（土）…… 9
　　第２日　12月２日（日）……11
Programme　Saturday 1 December ……12
　　Sunday 2 December ……13
発表要旨　第１日　12月１日(土)　研究発表Ⅰ……15
　　研究発表Ⅱ……17
　　研究発表Ⅲ……19
　　第２日　12月２日(日)　研究発表Ⅳ……21
　　研究発表Ⅴ……22
　　研究発表Ⅵ……23

11月12日（月）［必着］までに，申込フォーム：
https://goo.gl/forms/1aC2VQrPuShAlHIi2（学会 ML 経由推奨），
あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

＊出張証明書が必要な方は，その旨をご記入下さい。

大会準備委員

狩野晃一（委員長）　林邦彦（副委員長）
福田一貴　工藤義信　佐藤桐子　和田忍　岡本広毅

開催校委員

小塚良孝

事務局

〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3
広島大学大学院文学研究科　大野英志研究室内
Tel. 082-424-6678　Email: jsmes2017@gmail.com

会長挨拶

会員の皆様

仲秋の候，会員の皆様には，ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。すでにご案内させていただいていますように，お陰様で，日本中世英語英文学会第34回全国大会を，来る12月１日(土)，２日(日）の両日，愛知教育大学にて開催する運びとなりました。ここに大会のプログラムをお送りします。会員の皆様がふるってご参加くださいますよう，どうぞよろしくお願い申し上げます。

本年度の大会も，数多くの研究発表が予定されており，両日とも昨年度の大会に劣らず充実した内容になっています。このようなプログラムを企画し準備していただいた大会準備委員会に感謝します。お一人でも多くの会員の皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

2018年10月吉日

日本中世英語英文学会

会長　地村　彰之

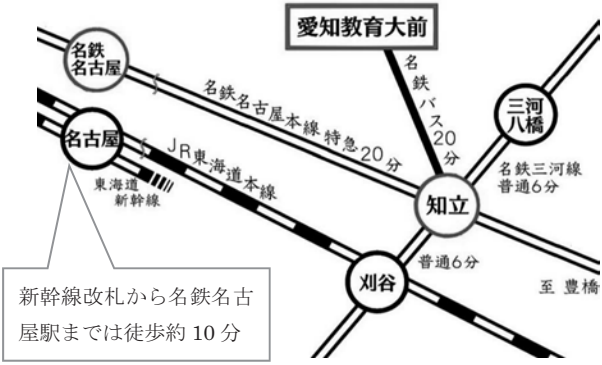
会 場 案 内

1．受付は，12月１日(土）11:30-16:00および２日(日）9:30-10:50に，教育未来館１Ｆ玄関ホール受付にて行われます。
2．当日会員会費は，一般1,000円，学生・定年退職者500円です。
3．ハンドアウトは，各発表会場で配布します。
4．大会本部は，教育未来館１Ｆキャリアデザインルームです。
5．会員控室は，教育未来館１Ｆ 103会議室です。
6．司会者・発表者控室は，教育未来館３Ｆ 講義室３Ｂです。
7．書店展示は，教育未来館１Ｆ玄関ホールで行われます。
8．ポスターセッションは，12月１日(土）12:00-13:00および２日(日）9:00-10:00に，教育未来館３Ｆ スペースで行われます。
9．懇親会は，12月１日(土）17:00からキャンパス内の第二福利施設で行われます。 会費（一般5,000円，学生2,500円）は，当日受付でお支払い下さい。
10. 車でのご来場も可能ですが，開催当日は推薦入試など複数の行事が予定されているため，できるだけ公共交通機関でお越しください。
11. キャンパス内はすべて禁煙です。
12. 構内の食堂は，土曜のみ第一福利施設が営業しています（営業時間11:15-13:30)。コンビニは，最寄駅「知立」北改札口横にファミリーマートがあります。
13. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っていません。

連　絡　先

愛知教育大学
〒448-8542 愛知県刈谷市井ケ谷町広沢1
（大会本部：教育未来館１Ｆ キャリアデザインルーム）
開催校連絡先：小塚良孝研究室　0566-26-2246

会場までのアクセス



【名古屋駅から】

・「名鉄名古屋駅」から名鉄名古屋本線（豊橋方面）に乗り,「知立駅」下車（特急利用で約20分)。「知立駅」から名鉄バスに乗り,「愛知教育大前」で下車（約20分)。

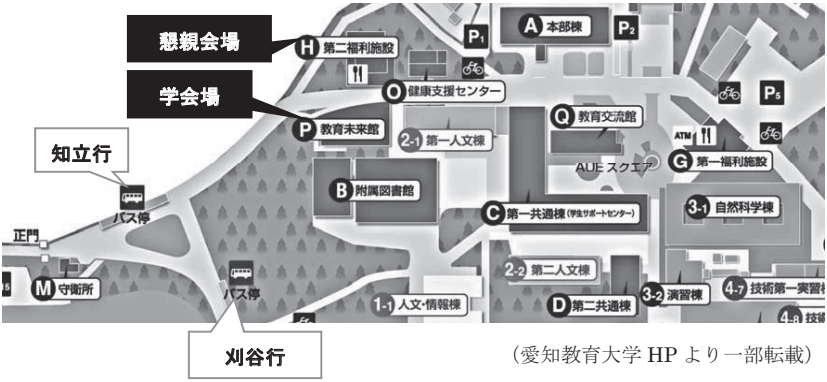
・「JR 名古屋駅」から東海道本線（豊橋方面）に乗り,「刈谷駅」下車（快速利用で約20分)。「刈谷駅」から名鉄三河線（知立駅行）に乗り,「知立駅」下車（約６分)。「知立駅」から名鉄バスに乗り,「愛知教育大前」で下車（約20分)。

【中部国際空港（セントレア）から】

・中部国際空港から名鉄空港線に乗り,「神宮前駅」下車（特急利用で約30分)。「神宮前駅」から名鉄名古屋本線（豊橋方面）に乗り,「知立駅」下車（特急利用で約14分)。「知立駅」から名鉄バスに乗り,「愛知教育大前」下車（約20分)。

土日　名鉄バス時刻表				
知立→愛知教育大前			愛知教育大前→知立	
7 時	09　28　35　45　58		12 時	16　36　56
8 時	12　22　35　52		13 時	16　46
9 時	05　22　35　52		14 時	16　46
10 時	12　30　52		15 時	16　40
11 時	22　52		16 時	00　15　30　45
12 時	12　30　52		17 時	00　15　30　45
13 時	22　52		18 時	00　15　30　45
14 時	22　52		19 時	00　15　30　45
15 時	22　52		20 時	05　25　45
16 時	05　30　52		21 時	05　25　50
17 時	05　22　35　52		22 時	10

愛知教育大学詳細図（学会場周辺）



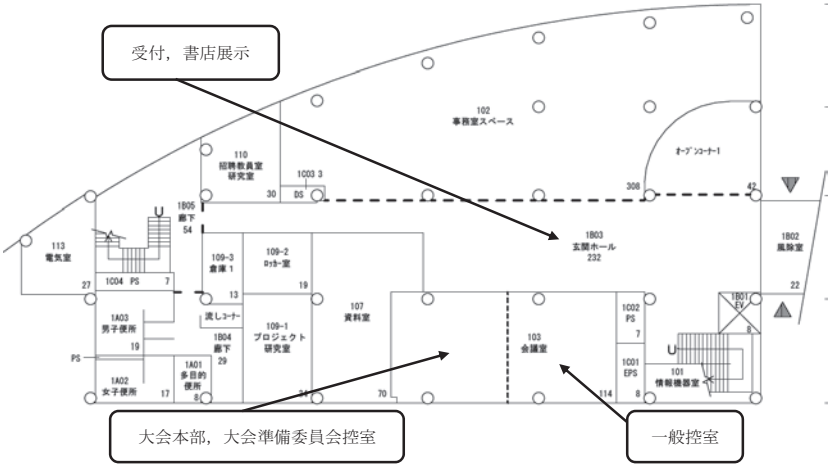
（愛知教育大学 HP より一部転載）

学会場詳細案内（全て教育未来館で行われます）

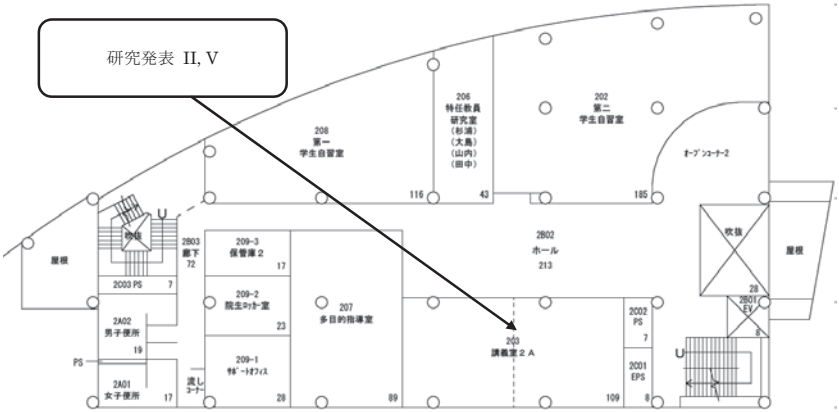
1F	大会本部 第２回大会準備委員会 大会準備委員会控室	キャリアデザインルーム
	第２回編集委員会 一般控室	会議室
	書店展示	玄関ホール
2F	第２回評議員会 研究発表　II・V	講義室２A
3F	開会式・総会 研究発表　I・IV 閉会式	多目的ホール
	研究助成セミナー 東支部幹事会	講義室３A
	司会者・発表者控室	講義室３B
	研究発表　III・VI	講義室３C
	ポスターセッション	スペース

会場見取り図

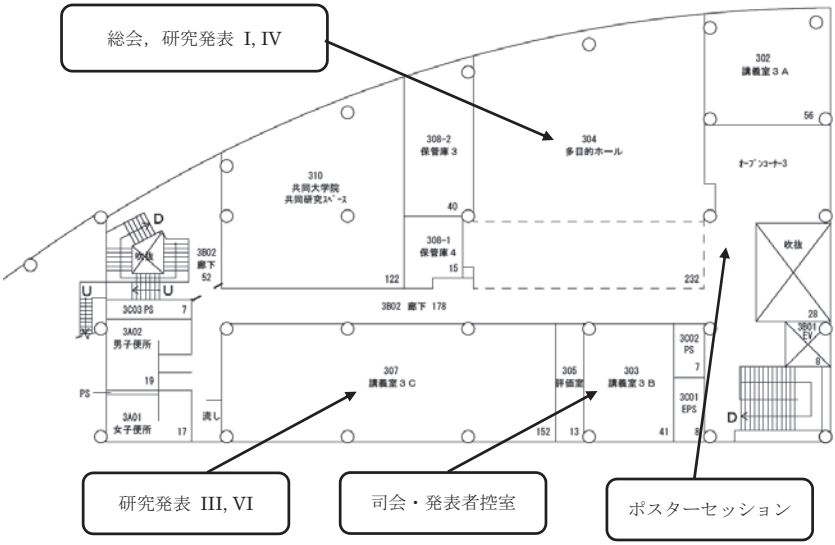
教育未来館１F



教育未来館2F



教育未来館3F


総会，研究発表 I, IV
研究発表 III, VI
司会・発表者控室
ポスターセッション
302
講義室３Ａ
56
304
多目的ホール
308-2
保管庫３
40
308-1
保管庫４
15
122
232
310
共同大学院
共同研究ｽﾍﾟｰｽ
3B02
廊下
52
3B02 廊下 178
3C03 PS
7
3A02
男子便所
19
PS
3A01
女子便所
17
流し
307
講義室３Ｃ
152
305
評価室
13
303
講義室３Ｂ
41
3C02
PS
7
3C01
EPS
8
吹抜
28
3B01
EV
8
D
U
K

日本中世英語英文学会　第34回全国大会プログラム

2018年12月１日（土）・２日（日）
愛知教育大学
〒448-8542 愛知県刈谷市井ケ谷町広沢1
（大会本部：教育未来館1F キャリアデザインルーム）
開催校連絡先：小塚良孝研究室 0566-26-2246

第1日　12月1日（土）

11:30-16:00　受付（教育未来館1F 玄関ホール）
＊会員控室（教育未来館1F 103会議室）

12:00-13:00　ポスターセッション（教育未来館3F スペース）

13:00-13:45　開会式・総会（教育未来館3F 多目的ホール）

司会　三浦あゆみ（大阪大学）
開会の言葉　会長　地村彰之（岡山理科大学）
開催校挨拶　愛知教育大学理事・副学長　中田敏夫
議事
事務局報告　事務局長　大野英志（広島大学）
編集委員会報告　編集委員長　唐澤一友（立教大学）
大会準備委員会報告　大会準備委員長　狩野晃一（明治大学）
大会案内　開催校委員　小塚良孝（愛知教育大学）

14:00-16:30　研究発表Ⅰ（教育未来館3F 多目的ホール）

14:00-14:40　司会　澤田真由美（愛知学院大学）
１．Katherine Group と Wooing Group に見る *Ancrene Wisse* ‘inwit’の背景
井野崎千代子（大阪産業大学他非常勤講師）

14:55-15:35　司会　和治元義博（北里大学）
２．中世の異端者としてのイエス―N タウン劇の裁判を中心に―
末松良道（獨協大学非常勤講師）

15:50-16:30　司会　小川真理（明治大学非常勤講師）
３．バースの女房の結婚における悲哀―Whose Woe Is It Anyway? ―
野地　薫（関東学院大学他非常勤講師）

14:00-16:30　研究発表Ⅱ（教育未来館2F 講義室2A）

14:00-14:40　司会　伊藤盡（信州大学）

4．イングランドにおける古ノルド語由来の地名
—同根語による置き換えと古ノルド語話者の古英語に対する理解力

小河　舜（立教大学大学院）

14:55-15:35　司会　小川浩（東京大学名誉教授）

5．古英語散文における beon/wesan ＋現在分詞構文

堀口和久（千葉経済大学）

15:50-16:30　司会　唐澤一友（立教大学）

6．Anglo-Saxon Soundscapes: The Song of the Sea

Britton Brooks（東京大学）

14:00-16:30　研究発表Ⅲ（教育未来館3F 講義室3C）

14:00-14:40　司会　片見彰夫（青山学院大学）

7．中英語期における丁寧標識の機能—韻文と散文を比較して

泉類尚貴（慶應義塾大学大学院
日本学術振興会特別研究員）

14:55-15:35　司会　片見彰夫（青山学院大学）

8．使役動詞 make の補文内部の統語構造における通時的研究

村岡宗一郎（日本大学文理学部
人文学研究科研究協力員）

15:50-16:30　司会　井上典子（関西大学）

9．15世紀の韻文ロマンス *Ipomydon (B)* の六音節行

池上　昌（慶應義塾大学名誉教授）

17:00-19:00　懇親会（第二福利施設）

第2日　12月2日(日)

9:00-10:00　ポスターセッション（教育未来館3F スペース）

9:30-10:50　受付（教育未来館1F 玄関ホール）
＊会員控室（教育未来館1F 103会議室）

10:00-11:30　研究発表Ⅳ（教育未来館3F 多目的ホール）

10:00-10:40　司会　壬生正博（福岡歯科大学）
10. レジナルド・ピーコックと理性の神学
井口　篤（慶應義塾大学）
10:50-11:30　司会　平山直樹（尾道市立大学）
11. Margaret Paston の書簡作成における amanuenses 達の役割
小原　平（東京慈恵会医科大学）

10:00-11:30　研究発表Ⅴ（教育未来館2F 講義室2A）

10:00-10:40　司会　三浦あゆみ（大阪大学）
12. 中英語期における liken の意味及び用法について
齊藤雄介（日本大学非常勤講師）
10:50-11:30　司会　狩野晃一（明治大学）
13. 初期中英語における語頭の黙字の <h>
藤原保明（筑波大学名誉教授・聖徳大学名誉教授）

10:00-11:30　研究発表Ⅵ（教育未来館3F 講義室3C）

10:00-10:40　司会　西村秀夫（三重大学）
14.「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造
中尾佳行（福山大学）
10:50-11:30　司会　大沼由布（同志社大学）
15.「聖堂参事会員の助手の話」における科学とテクノロジー
浅川順子（慶應義塾大学名誉教授）

11:40-11:55　閉会式（教育未来館3F 多目的ホール）
閉会の言葉　　**副会長**　寺澤盾（東京大学）

PROGRAMME

SATURDAY 1 DECEMBER

11:30-16:00 Registration (Entrance Hall, 1F, Kyoiku-Mirai-Kan)
*Members' Tea Room (103, 1F, Kyoiku-Mirai-Kan)

12:00-13:00 Poster Session (Open Corner, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

13:00-13:30 Plenary Session (Multipurpose Hall, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)
Presider: MIURA, Ayumi, *Osaka University*
Opening Address JIMURA, Akiyuki
President of JSMES, *Okayama University of Science*
Welcome Address NAKADA, Toshio
Trustee, Vice-President, *Aichi University of Education*
Business Announcements

14:00-16:30 Paper Session I (Multipurpose Hall, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

14:00-14:40 Presider: SAWADA, Mayumi, *Aichi Gakuin University*
1. Incunabula period of 'inwit' in *Ancrene Wisse?* : Katherine Group and Wooing Group
INOSAKI, Chiyoko, *Osaka Sangyo University*

14:55-15:35 Presider: WAJIMOTO, Yoshihiro, *Kitasato University*
2. Jesus as a Medieval Heretic—On the Trial Scenes in the N-town Plays—
SUEMATSU, Yoshimichi, *Dokkyo University*

15:50-16:30 Presider: OGAWA, Mari, *Meiji University*
3. The Woe in Alison's Marriage: Whose Woe Is It Anyway?
NOJI, Kaoru, *Kanto Gakuin University*

14:00-16:30 Paper Session II (Lecture Room 2A, 2F, Kyoiku-Mirai-Kan)

14:00-14:40 Presider: ITO, Tsukusu, *Shinshu University*
4. Old-Norse Place-Names in England: Cognate Substitution and the Intelligibility of Old English to the Vikings
OGAWA, Shun, *Graduate Student, Rikkyo University*

14:55-15:35 Presider: OGAWA, Hiroshi, *Emeritus Professor, University of Tokyo*

5. The beon/wesan + present participle construction in Old English
HORIGUCHI, Kazuhisa, *Chiba Keizai University*

15:50-16:30 Presider: KARASAWA, Kazutomo, *Rikkyo University*

6. Anglo-Saxon Soundscapes: The Song of the Sea
BROOKS, Britton, *University of Tokyo*

14:00-16:30 Paper Session III (Lecture Room 3C, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

14:00-14:40 Presider: KATAMI, Akio, *Aoyama Gakuin University*

7. The Functions of Politeness Markers in Middle English—Comparison between Verse and Prose
SENRUI, Naotaka, *Graduate Student, Keio University / JSPS Research Fellow*

14:55-15:35 Presider: KATAMI, Akio, *Aoyama Gakuin University*

8. The Diachronic Study on the Complements of the Causative Verb MAKE
MURAOKA, Soichiro, *Nihon University, Research Fellow*

15:50-16:30 Presider: INOUE, Noriko, *Kansai University*

9. Six-syllable Lines in the 15th Century Metrical Romance *Ipomydon (B)*
IKEGAMI, Masa, *Emeritus Professor, Keio University*

17:00-19:00 Reception (Daini-Fukuri-Sisetsu)

SUNDAY 2 DECEMBER

9:00-10:00 Poster Session (Open Corner, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

9:30-10:50 Registration (Entrance Hall, 1F, Mirai-Kyoiku-Kan)
*Members' Tea Room (103, 1F, Kyoiku-Mirai-Kan)

10:00-11:30 Paper Session IV (Multipurpose Hall, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

10:00–10:40 Presider: MIBU, Masahiro, *Fukuoka Dental College*

10. Reginald Pecock's Theology of Reason

IGUCHI, Atsushi, *Keio University*

10:50–11:30 Presider: HIRAYAMA, Naoki, *Onomichi City University*

11. The role of amanuenses in the letters of Margaret Paston

OHARA, Osamu, *Jikei University School of Medicine*

10:00–11:30 Paper Session V (Lecture Room 2A, 2F, Kyoiku-Mirai-Kan)

10:00–10:40 Presider: MIURA, Ayumi, *Osaka University*

12. The Semantic and Syntactic Study on *liken* in Middle English

SAITO, Yusuke, *Nihon University*

10:50–11:30 Presider: KANO, Koichi, *Meiji University*

13. Initial Silent <h>s in Early Middle English

FUJIWARA, Yasuaki, *Emeritus Professor, Tsukuba University / Emeritus Professor, Seitoku University*

10:00–11:30 Paper Session VI (Lecture Room 3C, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

10:00–10:40 Presider: NISHIMURA, Hideo, *Mie University*

14. The Language of *Sir Thopas* and Its Multidimensional Schematization

NAKAO, Yoshiyuki, *Fukuyama University*

10:50–11:30 Presider: ONUMA, Yu, *Doshisha University*

15. Science and Technology in the *Canon's Yeoman's Tale*

ASAKAWA, Junko, *Emeritus Professor, Keio University*

11:40–11:55 Closing Address (Multipurpose Hall, 3F, Kyoiku-Mirai-Kan)

TERASAWA, Jun, Vice-President of JSMES, *University of Tokyo*

発表要旨

第1日　12月1日（土）

15:00-16:30　研究発表Ⅰ（教育未来館3F 多目的ホール）

15:00-15:40　司会　澤田真由美（愛知学院大学）

1．Katherine Group と Wooing Group に見る *Ancrene Wisse* ‘inwit’ の背景

井野崎千代子（大阪産業大学他非常勤講師）

Ancrene Wisse（Corpus 写本）の初出英語 *conscience* は，vernacular の‘inwit’にグロスされ，‘inwit’もその意味で用いられて記録に残るのは本作品が初めてであり，本書は一つの概念の伝達に起こった言語変化の証人となっている。本作品を含む Ancrene Wisse Group は Katherine Group と Wooing Group に分けられているが，‘conscience’という英語の語彙がなぜ最初に *Ancrene Wisse* に現れ，なぜ‘inwit’という語彙がグロスとして選ばれたのか，もとより本作品を含むグループの作品内を見るだけではその理由を知り得るすべはないが，そのヒントとなる要素を，本作品に最も近い作品群の中に探ってみたい。古英語の影響を色濃く残す作品が多いこれらのグループにおいて，これまで指摘されてきた頭韻の用法を見据えながら，以下の二冊の校訂本を基に *conscience* に関する語彙がどのように各作品において用いられているかを調べ，できればジャンルの問題も考えながら，*Ancrene Wisse* における‘inwit’への道筋を少しでも辿り始めることができればと思う。

1) *The Katherine Group. A Three-Manuscript Parallel Text. Seinte Katerine, Seinte Marherete, Seinte Iuliene, and Hali Meiôhad, with Wordlists.* eds. Shoko Ono and John Scahill with Keiko Ikegami, Tadao Kubouchi, Harumi Tanabe, Koichi Nakamura, Satoko Shimazaki and Koichi Kano, *Studies in English Medieval Language and Literature* ed. Jacek Fisiak, 48 (Peter Lang: Frankfurt), 2011.
2) *Sawles Warde and the Wooing Group: Parallel Texts with Notes and Wordlists*, eds. Harumi Tanabe and John Scahill, with Shoko Ono, Keiko Ikegami, Satoko Shimazaki and Koichi Kano, *Studies in English Medieval Language and Literature* ed. Jacek Fisiak, 48 (Peter Lang: Frankfurt), 2015.

15:55-16:35　**司会**　和治元義博（北里大学）

２．中世の異端者としてのイエス―N タウン劇の裁判を中心に―

末松良道（獨協大学非常勤講師）

聖史劇に描かれたユダヤの宗教裁判官カヤパとアンナスは，ピラトやヘロデ同様，中世の暴君のイメージに沿って造形された人物と言えるだろう。中世において，多くの司教，大司教は，大貴族の家系出身であり，当時の政治の中枢において，王のアドバイザーや宗教裁判所の裁判官として，大きな世俗的権力をふるった。福音書に書かれたイエスの裁判における世俗の裁判官ピラトと聖職者との関係は，14世紀末から15世紀にかけてのロラードなどの異端の迫害と符合する面がある。イングランドの教会の権威者達は，既に大陸で行われてきたような死刑を異端者に適用する方法を模索し，世俗の裁判を利用した。そうした状況は，聖史劇の受難のパジェントに反映されている可能性がある。４大サイクルにおいて，‘Lollard’あるいは，それに類した単語はタウンリー写本の「最後の審判」で‘Lollar’という語が出てくるに過ぎない。しかし，N タウン写本の第２の受難劇では複数回，‘heretic’や‘heresy’という単語が見られる。宗教と世俗の権力者が，異端の指導者を怖れ迫害する状況を，中世末期の歴史的文脈を参照しつつ，聖史劇のテキストにおいて検証したい。

15:50-16:30　**司会**　小川真理（明治大学非常勤講師）

３．バースの女房の結婚における悲哀―Whose Woe Is It Anyway? ―

野地　薫（関東学院大学他非常勤講師）

「バースの女房のプロローグ」で語られる結婚の悲哀とは，果たして誰にとっての「悲哀」なのか。バースの女房は12歳で初めて結婚し，40歳過ぎて5人目の夫を持つに至るまで，あたかも自分が被害者であるかのように結婚の苦労を奔放に主張する。しかし，彼女から絶えず不平不満をぶつけられ，責められる夫たちこそ悲哀の対象である，というのが従来の見方である。それに対して本発表では，なぜバースの女房が，夫たちに対してそのような態度を取るに至ったのか，彼女の言葉の端々に見え隠れする結婚生活の実態に踏み込んでみる。そして，いたいけな少女がやがて気の強い女丈夫に変貌せざるを得なかった，その「悲哀」の形成を探る。バースの女房は５回の結婚を正当化しようとするが，当時結婚と死別を繰り返すことは，決して珍しいことではなかった。チョーサーの身近な人物の中にも何度も再婚した女性たちがいた。彼女たちとの関連からも，バースの女房という人物像の形成に迫ってみたい。

15:00-16:30 研究発表Ⅱ（教育未来館2F 講義室2A）

15:00-15:40　司会　伊藤　盡（信州大学）

4. イングランドにおける古ノルド語由来の地名 —同根語による置き換えと古ノルド語話者の古英語に対する理解力

小河　舜（立教大学大学院）

イングランドにおいて古ノルド語に由来する地名は，Viking Age における古英語と古ノルド語の言語接触や言語状況を示唆する資料として重要である。一方で，Eilert Ekwall や Kenneth Cameron, Gillian Fellows-Jensen をはじめとする従来の研究では，*by* や *thorp* といった定住地を示す地名要素がとりわけ注目され，各地名要素の語源研究や古英語話者，古ノルド語話者の定住地およびその時期の特定に研究が注力されてきた。しかし近年，古英語を要素とする既存の地名が同根語の古ノルド語に置き換えられている現象が Matthew Townend によって注目され，Viking Age における古ノルド語話者が古英語に高い理解力を示していたという主張を地名から例証する研究が *Language and History in Viking Age England: Linguistic Relations between Speakers of Old Norse and Old English* (2002) を中心に行われている。本発表では，先行研究において同根語による置き換えが確認されている 61 の地名要素を *The Cambridge Dictionary of English Place-Names* (2010) を使用し地理的，通時的に分析する。その結果を踏まえ，Viking Age における古英語と古ノルド語をめぐる言語状況の地域差，時代差を検討し，Viking Age における両言語をめぐる言語状況のより詳細な説明を試みる。

14:55-15:35　司会　小川　浩（東京大学名誉教授）

5. 古英語散文における beon/wesan ＋現在分詞構文

堀口和久（千葉経済大学）

現代英語の進行形の起源や発達についてはさまざまな議論があり，これについて古英語期の beon/wesan+ 現在分詞の構文に起源があるという見解がある。この beon/wesan+ 現在分詞の構文は，拡充形の構文とも呼ばれ，これまで Mossé (1938)，Nickel (1969)，Mitchell (1985)，さらに中英語の統語法との関連では Mustanoja (1960) などの研究がなされ，用法や機能等について議論がなされてきた。Ogura (2014) では temporal use と descriptive use という二つの

用法に分類がなされているが，単文レベルでの文法的分析が中心的である。他方，小川（2010）は古英語の拡充形の意味の１つとして談話標識としての機能があると指摘し，談話つまりディスコースの流れの中で作者の態度や作品の主題との関連性について論じている。本研究発表では，*Anglo-Saxon Chronicle*，古英語訳 Bede，古英語訳 Orosius，Ælfric などの古英語期の散文作品を中心的に扱い，文法的範疇という側面よりはむしろ文体的機能に着目し，この談話標識としての機能について，類型化やより詳細な分析を試みたい。

15:50-16:30　司会　唐澤一友（立教大学）

6. Anglo-Saxon Soundscapes: The Song of the Sea

Britton Brooks（東京大学）

The Anglo-Saxon literary engagement with the sea, in both Anglo-Latin and Old English, displays a profound polyvalency, which is connected to the variety of relationships they had with it: it was the connective pathway between the islands and the continent; it was the shoreline highway between villages and towns; it was the wild and untameable *garsecg* which encircles the world; it was the unimaginably vast *oceanus*, a plain for interpretative projection. Literary descriptions of the sea in Anglo-Saxon texts reflect this multitude of relationships, and have been the subject of various scholarly endeavors. One aspect of the sea which has received remarkably little scholarly attention is its aural qualities, the way Anglo-Saxon perceived and encoded the soundscapes of this most important element of the natural world. This paper will explore the depiction of the sea's soundscapes in Anglo-Saxon texts, with the aim of developing a working theoretical framework for understanding Anglo-Saxon engagement with soundscapes more broadly. The texts I will explore include Bede's Latin metrical *Vita S. Cuthberti*, Bede's prose *Vita S. Cuthberti*, the *Old English Psalms, The Seafarer*, and *Beowulf*. I will argue that the depictions of the sea's sonic qualities in the texts not only imply a shared aural knowledge of specific, and culturally defined, soundscapes, but also a connection to wider Anglo-Saxon conceptions of the relationship between sanctity and the natural world.

14:00-16:30 研究発表Ⅲ（教育未来館3F 講義室3C）

14:00-14:40　司会　片見彰夫（青山学院大学）

7. 中英語期における丁寧標識の機能―韻文と散文を比較して

泉類尚貴（慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員）

本研究発表は，中英語期の韻文と散文の文体を比較することによって，丁寧標識（politeness markers）にどのような機能があるかについて調査し，中英語期のポライトネスの一端を明らかにしようとするものである。韻文における丁寧標識は，一見，韻律のための埋め草のように現れている箇所があるが，呼称表現や受け手の身分，行為の負担度を考慮すると，丁寧標識としても見なすべき例がある。

そこで，本研究では韻律の要請として用いられているとも考えられる丁寧標識について，韻文と散文の文体差，ならびに近年勃興している周辺部の知見を援用して，丁寧標識が生起する位置に注目して調査を行う。対象とする丁寧標識について，中英語期には，命令文と共起して‘I pray’や‘if you leste’などの標識が現れていることから，コンコーダンスやCorpus of Middle English Verse and Proseを資料として調査する。

結論として，呼称表現や行為の負担度といった要素から勘案して，韻文・散文のあいだには，丁寧標識の持っている機能に大きな隔たりは見られないことを示す。

15:50-16:30　司会　片見彰夫（青山学院大学）

8. 使役動詞 make の補文内部の統語構造における通時的研究

村岡宗一郎（日本大学文理学部人文学研究科研究協力員）

現代英語における使役動詞 make は補文内部に原形不定詞を伴う構造が一般的である。

(1) They ***made him sign*** the contract against his will.（江川（1991[3]: 334））
しかし，通時的に見ると原形不定詞だけでなく to 不定詞を伴う構造も見られる（cf. Mustanoja（1960: 533），安藤（2008: 116），山村（2015: 10））。

(2) a. she ***maketh men mysdo*** many score tumes.（PPI. Biii 122）（Mustanoja（1960: 533））
b. Þe veond hit ***makede me to don***.（*Ancr*. 136）（ibid.）

この通時的変化を山村（2015）は以下の様にまとめている。

(3) 使役動詞 make の補文における不定詞の選択（cf. 山村（2015: 10））

	φ + to Inf.	OBJ + to Inf.	φ + Inf.	OBJ + Inf.
PPCME2（ME）	21（4.8%）	**241（55.4%）**	34（7.8%）	139（32.0%）
PPCEME（EModE）	1（0.2%）	127（26.1%）	0（0.0%）	**359（73.7%）**
PPCMBE	0（0.0%）	36（19.7%）	0（0.0%）	**147（80.3%）**

しかし，なぜ時を経るにつれて to 不定詞を伴う構造が衰退し，原形不定詞を伴う構造が一般化したのだろうか。本発表ではこれらの要因は一つ目に借用語の流入とその意味の棲み分け，そして二つ目に補文内部における機能範疇の出現によるものであると提言する。

15:50-16:30　司会　井上典子（関西大学）

9. 15世紀の韻文ロマンス *Ipomydon (B)* の六音節行

池上　昌（慶應義塾大学名誉教授）

The Lyfe of Ipomydon (*Ipomydon (B)*) (British Library MS, Harley 2252, ff. 54-84) は2346行からなる four-beat couplet である。ここに，一行が六音節から成る行が75ある。詩人はこれに / x / / x /（/ は beat, x は offbeat）というリズムを与えて，一行中に four-beat を実現した。同じ六音節の four-beat 行は，作者自筆の写本に収められた韻文ロマンス *The Ashmole Sir Ferumbras* として知られる作品にもある。four-beat 行を六音節のフレーズでまかなう技法は，‘popular’ verse 作家が共有していたようである。しかし，Gower や Chaucer には無い。このことは，Gower や Chaucer の four-beat couplet (short couplet) と一味違った別種の four-beat couplet が ME 期に存在していたことを示している。

第2日　12月2日（日）

10:00-11:30 研究発表Ⅳ（教育未来館3F 多目的ホール）

10:00-10:40　司会　壬生正博（福岡歯科大学）

10. レジナルド・ピーコックと理性の神学

井口　篤（慶應義塾大学）

本発表では，神学者レジナルド・ピーコック（Reginald Pecock, c. 1395-1458）の諸著作のうち『キリスト教の原理』（*The Reuel of Crysten Religioun*, 1443）について論じる。その際，ピーコックが救済論に関してどのような立場をとっていたのか，いわゆる「新しい道」（*via moderna*）を提唱する神学者たちが主張していた「各自ができるところをなす（*facere quod in se est*）ことにより救済に達することができる」というテーゼをピーコックがどのように変形させて俗語読者層に伝えたのかについて注目したい。そうすることによって，ともすれば15世紀のいわゆる「俗語神学」（vernacular theology）を正統と異端の枠組みで比較検討する作業から解き放ち，（大陸の神学に対する）イングランドの神学というより大きな思潮の流れにおける一変種として位置付け，その意義を再評価することにわずかばかり寄与することができるように思われる。

10:50-11:30　司会　平山直樹（尾道市立大学）

11. Margaret Paston の書簡作成における amanuenses 達の役割

小原　平（東京慈恵会医科大学）

Davis (Part I, pp.311-314) の no.189の書簡は，Margaret から John I に送られたものであるが，最初の25行は James Gloys の手によるもので，残りの部分を Richard Calle が書いている。この書簡は，書き手が代わる直前の部分の訂正や書き加えが興味深い。Calle がそこで2か所ほど変更を加えていて，そのために文の構造が変化してしまうのである。従って，この書簡は Margaret と amanuensis の collaboration だとしても良いように思われる。彼女の書簡の全てではないにしても, collaborative な書簡が存在することは間違いないだろう。

当研究では，Margaret Paston の書簡において，amanuenses 達による訂正や書き加えを調査，分類することによって，彼らの書簡作成中の役割を解明する。なおこのような研究では実物の書簡を調査する必要が出てくるが，当研究では，書簡の所蔵先の British Library からのマイクロフィルムをデジタル化したものを，分析で多く使用している。

10:00-11:30 研究発表Ⅴ（教育未来館2F 講義室2A）

10:00-10:40　司会　三浦あゆみ（大阪大学）

12. 中英語期における liken の意味及び用法について

齊藤雄介（日本大学非常勤講師）

本発表では中英語期に存在した非人称動詞 liken を扱う。liken は現代英語の like の直系の語源であるが，中英語期においては「喜ばせる」の意味を表し，主格の主語を必要としない非人称用法で使用されていた。さらに，その時点で少数ながら「好む」の意味を表す例も見受けられた。これらの点において liken は，中英語期において同様に「喜ばせる」の意味を表していた quemen や plesen とは異なっている。

Ogura (1996) では，古英語期においては quemen の語源である cweman が主に人称用法を担い，liken の語源である lician が非人称用法として使用されていたことが述べられている。さらに，Miura (2015) においては，liken に「好む」の意味があったことは指摘されているが，その理由については明確な記述が見られない。そこで本発表では PPCME2及び PPCEME を資料とし，中英語期の liken の意味及び用法を観察，分析することによって，中英語期の liken が現代英語の like に至った過程を考察したい。

10:50-11:30　司会　狩野晃一（明治大学）

13. 初期中英語における語頭の黙字の＜ h ＞

藤原保明（筑波大学名誉教授・聖徳大学名誉教授）

チョーサーなどの後期中英語の語頭の <h> が黙字か否かの情報は，不定冠詞 a ～ an や所有代名詞 my ～ myn の分布の相違，フランス語からの借用語か在来語かの区別などに基づくが（my ‘fader ‘my father’ ~ myn ‘heed ‘my head’, ‘swich an ‘haunt ‘such an abode’），これらの情報が決め手になるとは限らない。一方，不定冠詞が発達途上であり，語末の <n> の多くが維持されている初期中英語の場合，語頭の <h> の発音の決め手となるのは何なのか。たとえば，1200年頃の *Ormulum* は閉音節での母音の長さを示す独特の表記，押韻の欠如，弱強のリズムの厳守などで知られるが，この詩では語頭の <h> の発音の有無に何らかの工夫がなされているのであろうか。今回の発表では，この詩を厳密に韻律分析（scansion）し，語頭の <h> の発音の有無に係る原則

が解明できたので，人称代名詞の he‘he’, hiss‘his’, himm‘him’, hemm ‘them’, まれに hire‘her’や疑問詞の hu‘how’などの <h> は語末の <e> の直後では規則的に黙字となるなど，興味深い事実を指摘する。

10:00-11:30 研究発表Ⅵ（教育未来館3F 講義室3C）

10:00-10:40　司会　西村秀夫（三重大学）

14.「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造

中尾佳行（福山大学）

「トパス卿の話」は，従来（テイルライム）ロマンスのパロディとして，Loomis (1940-42)，Burrow (1984)，Tschann (1985)，Purdie (2008) 等，多くの研究者に注目され，間テクスト性，詩型，レジスター，final -e 等，多岐に渡って研究されてきた。しかし，それぞれは意味論的に密接な相互関係があるにも拘わらず，未だ独立的であり必ずしも統一的に捉えられてはいない。本発表では，Langacker (2000) のスキーマ理論（スキーマ，典型事例，拡張事例）を援用し，従来の研究を見直すと共に，「トパス卿」の言語の新たな意味付けを探ってみたい。その際，「縮減」をテクストのマクロレベルからミクロレベルまで通底するスキーマと見立て，それは一平面ではなく多次元的（内容記述的，表現モード的，メタ言語的スキーマ）に高次化していることを提案する。この構造を通して，言語の意味がどのようにまた何故生みされていくのか，記述・説明を試みる。例えば，“Neither wyf ne childe” (Sir Thopas, VII 806) の childe は，この構造を行き来する中でダイナミックに意義付けされていく。

10:50-11:30　司会　大沼由布（同志社大学）

15.「聖堂参事会員の助手の話」における科学とテクノロジー

浅川順子（慶應義塾大学名誉教授）

錬金術詩集 *Theatrum Chemicum Britannicum* (1652) を編んだアシュモール（Elias Ashmole）は，その中にチョーサーの「聖堂参事会員の助手の話」を収めた。この作品を選択した理由として，１）真の学問（錬金術）の名の下に行われてきた詐欺を世に知らしめること，２）チョーサーという詩人がこの学問の大家であったことを示すこと，という2点を挙げている。アシュモールの指摘の通り，この作品の風刺的要素は明らかである。しかし，批判の対象とされているのは第二部で語られる詐欺行為だけではない。聖堂参事会員の助手

は第一部と第二部結部において，錬金術の学問としての分かりにくさ，秘密主義を指摘し，テクノロジーとしての不完全性について経験を踏まえて語っている。チョーサーはなぜ錬金術に関する学問と技術の両方を批判しながら，その一方でそれらに関する広く詳細な学識を披露したのか。本発表では，批判について歴史的背景を確認し，「チョーサーの科学」における錬金術の位置，錬金術に関する知識披露の意味，という問題について考察する。

復刻集成　**子供のためのチャップブック**

－ 19 世紀英国伝承歌・物語・絵本集－　全 1 巻＋和文解説書

Songs and Tales for Children:
A Collection of Chapbooks in 19th-Century Britain

【編集・解説】三宅興子（梅花女子大学名誉教授）【協力】梅花女子大学図書館

B5 判　本体 c. 210 pp. ＋ Uncut 判 7 点は折込で収録・図版多数
ISBN: 978-4-902454-40-6　本体価 ￥19,800-（＋税）

● 19 世紀前半の英国で子ども向けチャップブックのシリーズを発行した重要出版社、ケンドリュー社（ヨーク）、ラッシャー社（バンバリー）の出版物 40 点（他 3 点）を完全復刻。いずれも現在、入手は極めて困難な貴重資料。
●児童文学のみならず、広く大衆文化史研究の素材として重要。

Eureka Press c/o Edition Synapse　〒 100-0014 東京都千代田区永田町 2-17-5-201
Tel: 03-6257-1030 Fax: 03-5521-0026 http: //www.aplink.co.jp/synapse 【カタログ呈】

英語学パースペクティブ
英語をよりよく理解するための 15 章

龍城 正明　編著　　A5 判 408 頁
定価（本体 3,200 円＋税）
ISBN 978-4-523-30075-5

中英語の統語法と文体

田島 松二　著　　A5 判 296 頁
定価（本体 4,600 円＋税）
ISBN 978-4-523-30076-2

鬱蒼たる中世英語の森探索の比類なき道しるべ！

南雲堂　〒 162-0801 東京都新宿区山吹町 361　E-mail : nanundo@post.email.ne.jp　TEL : 03-3268-2311

Eloquence of Chaucer's Women: The Wife of Bath, Criseyde, and Prudence
チョーサーが描く雄弁な女性たち（英文）
バースの女房、クリセイデ、プルーデンスを例に、女性観を多角的に探る。
野地薫著／A5上製・248頁／定価　本体3500円+税／
ISBN978-4-7553-0405-7

トマス・ハーディの文学と二人の妻
「帝国」「階級」「ジェンダー」「宗教」を問う
社会的・文化的コンテクストとハーディと二人の妻との関係性を考察。
土屋倭子著／四六判・412頁／定価　本体3500円+税／
ISBN978-4-7553-0403-3

プロミーシュース解放およびその他の詩集
附「改革への哲学的見解」
ロマン派の代表的詩人の原詩に詳細な解説と訳注を付し新訳で刊行。
パーシー・ビッシュ・シェリー著・原田博訳／四六上製・592頁／
定価 本体2500円+税／ISBN978-4-7553-0404-0

チェンチ一族
五幕からなる悲劇
16世紀末ローマを舞台に、ある一族の滅亡を描き社会に問うた異色の詩劇。
パーシー・ビッシュ・シェリー著・藤田幸広訳／四六判・256頁／
定価　本体2500円／ISBN978-4-7553-0410-1

地上の楽園　全2巻
ウィリアム・モリスの伝説的長編物語詩　森松健介訳で完訳。
第1巻「春から夏へ」A5上製・480頁／定価 本体3500円+税／
ISBN978-4-7553-0290-9
第2巻「秋から冬へ」A5上製・654頁／定価 本体4200円+税／
ISBN978-4-7553-0294-7

薬　局
十七世紀末ロンドン医師薬剤師大戦争
古典の改作、パロディに富む疑似英雄詩＝風刺物語詩の傑作。図版多数。
サミュエル・ガース著　西山徹編訳・高谷修、服部典之、福本宰之 訳・
岡照雄 序／A5上製・188頁／定価 本体2500円+税／
ISBN978-4-7553-0280-5

音羽書房鶴見書店
〒113-0033　東京都文京区本郷 4-1-14　☎ 03-3814-0491　Fax 03-3814-9250
http://www.otowatsurumi.com　e-mail: info@otowatsurumi.com